

<東北地区納税貯蓄組合連合会会長賞>

あたり前を叶える

福島市立渡利中学校

3年 川音 陽菜

税金なんて、無くていい。

私はそう考えていた。中学生の私は消費税ぐらいでしか税金を納めたことはないが、その少量のお金の差で欲しい物が買えなかったことが今まで何度もあったからだ。

しかし、私は税金によって救われた。2011年3月11日、東日本を襲った大地震。津波や建物の崩壊などにより、多くの命が失われ、多くの人が涙を流したあの悲劇。当時小学1年生だった私は、目の前でいったい何が起きているのか、テレビ越しで見た津波の映像はいったい何なのか。のみこめる状況ではなかった。

あれから7年という月日が流れた今、私は何の不自由なく暮らせている。ひび割れがひどく歩くことも困難だった道路は、何もなかったかのように平らな道路となり、小学校で避難中に落ちる様子を見た天床も、元通りとなっている。

私はそれらの修復などを「あたり前」のことだと思って、今まで過ごしていた。国が必ず行うこと。そういう仕組み。そのように考えていたので、町が元の姿になるために必要なお金のことはそれほど気にも止めずにいた。しかし、そのお金が税金からきていると知った時は驚いた。また、災害復旧費や東日本大震災復興特別会計があると知り、二度目の衝撃を受けた。後者においては、震災から約1年後に特別に創設されたらしく、今も続いているらしい。

私は税金のおかげで普通の生活が送れている。つまり、多くの人のお金で支

えられている。そう感じた。土壌除染で放射線の量が減ったことにより、マスクやガラスバッチの強制がなくなり外で遊べるようになった。また、県外へ避難した人も戻ってきている。水も止まったが、復旧し、安全に飲めるまで回復した。ふるさとに帰ることができる。食物などの安全が認められている。「あたり前」のことかもしれないが、素敵なことだと思った。

また、私は恩返しをしたいと思った。恩返しができなくても、何か協力できることはしたいと思った。

今、西日本の豪雨や多くの台風の影響で苦しんでいる人がいる。熊本地震や東日本大震災においても、復興しつつある状況だが、十分な暮らしができていない人や仮設住宅暮らしの人もある。そのような状況下で私にできる一つのこととして、税金を納めることがある。やはり、私が納められる税金は消費税ぐらいしかない。1円や10円などの少量のお金だ。だが、その税金で誰かの支えになれるのなら、税金はなくてはならない存在だと思う。どこの誰なのか知らない人でも、その人が必要としている。生活が豊かになる。力になる。笑顔になる。そう信じて、これからも、この先も、税金を納めていきたい。

そう。私があの時「あたり前」だと思ったことが、叶えられるように。